2023年6月18日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

「私たち」の礼拝

［ローマの信徒への手紙12章1～16節］

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。

[1] 「交わり」に向けられたことば

「ローマの信徒への手紙」を、読んできましたが、今日と来週でそれも終わりになります。読んで頂いた「ローマの信徒へ手紙」の12章ですが、印象深い言葉がこの中には沢山あると思いますよね。初めの「自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です」という言葉も、礼拝の本質を語る言葉としてとても有名ですし、5節の「わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです」も、これは「教会」の深い意味を語っていますよね。そして、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」といった有名な言葉などがここには並べられています。本当はじっくりと一つ一つの言葉を味わい所ですが、やはり中心にある言葉が1節の、礼拝への勧めの言葉だと思います。“自分の体を献げなさい…これこそあなたのなすべき礼拝です”ということ。「体」というのは、生活そのもののことですね。頭でっかちにならず、あなたの生活、あなたの生き方で神様を礼拝せよ、と語っていると思います。観念的じゃないのです。その理由は、何よりも主イエス・キリストご自身が、ご自分の身（体）をもって救いを成し遂げて下さったという所に、このパウロの勧めの根拠があると思います。

そして、これは個人に向けて語らえていると言うよりも、ローマの教会の人々、つまり、「教会」の交わりを形成している一人ひとりに向けられていると思います。パウロは「兄弟たち」とか「あなた方は」「私たちは」と語ったように「交わり」に対して語っているのです。

牧師である私がこういう言い方をすることをお許し頂きたいと思うのですが、「教会」という所は問題が何もない場所ではありませんよね。私たちは皆それぞれ、個人的な信仰のあり方があって、それは尊重しなければならないのは当然のことです。しかし、だからこそ難しいというということも言えると思います。私たちはそれこそロボットではないので、それぞれの性格も違えば、又、日によって感情が変わってくることもあります。また、生まれ育ってきた環境や、出会った信仰の先輩や牧師などによって信仰理解の形成も異なるのです。百人百様です。ですから、教会員同士や、牧師と教会員、昔からの教会員と新しい教会員などなど、行き違いや誤解、衝突のようなことが起こり、傷つき、或いは傷つけられて、教会行くのが嫌になってしまう、ということが起こることがあると思います。しかし私は、それでもと言いますか、いや、それだからこそと言った方が良いかと思いますが、そういう私たちお互いだからこそ、一緒に神様の前に出る礼拝を捧げるのがとても大事なことなのではないかと思います。

今日は、ぜひ皆さんにある牧師の言葉をご紹介したいと思っています。『街の牧師―祈りといのち―』（晶文社）という本を昨年出された沼田和也先生の、牧師としての葛藤の言葉です。沼田先生は現在、日本基督教団・王子北教会の牧師ですが、それ以前の教会で心を病み、一時閉鎖病棟に入院したこともあり、『牧師、閉鎖病棟に入る』という本も書いておられます。私は、この方の言葉がとても心に深く刺さることを感じるのです。私は沼田牧師が、「教会」という場所が非常にデリケートで傷つきやすい要素を抱えているのだということを直視していると思うのです。一部をご紹介させて頂きたいと思います。

[2] 神様はこの「教会」の中にいる―沼田和也先生の書物から

「聖書のパウロ書簡とか使徒言行録とかを読んでも、教会にはその始まりからトラブルが絶えなかったことが伝わってくる。様々な出自の人がそれぞれの仕方で福音を受け取るわけである。お互いの信仰理解が衝突しても不思議ではない。…現代においては教会内部での人づきあいがわずらわしく感じられ、他人への気遣いに疲れ果てて、 教会を去っていく人は多い。そうした人を前にして、わたしは牧師としての配慮の至らなさに恥じ入るばかりである。一方でわたしは、教会から人づきあいのわずらわしさを取り払うことは不可能であるとも考えている。なぜなら、教会における人づきあいのわずらわしさは、神を求める他人同士が集まっているという、この本質的な要素と不可分だからだ。教会においてわずらわしさが希薄になればなるほど、教会のメンバー同土がお互いを配慮しあうこともなくなっていく。他人とのかかわりを持つこと。それは他人を傷つけたり、他人から傷つけられたりする危険を負うということでもある。しかしこんにちインターネットの世界では、過ちを犯した人を皆で吊るし上げることに忙しい。誰だって吊るし上げられる側にはなりたくない。吊るし上げられる危険を避けるのにいちばん手っ取り早い方法は、誰ともかかわらないことだ。他人とかかわりを持ちさえしなければ、他人を不用意に傷つけ、責任を糾弾されることもない。しかしそうやって危険を避け続けていれば、他人とのかかわりはどんどん希薄になってゆくだろう。

牧師になった初任地で、礼拝堂の改築が行われた。高齢であった私の上司の牧師は改築の途中で病に倒れた。そこで牧師としての経験がほとんどないわたしが数干万円規模の工事の責任を引き受けることになった。教会の空気は険しかった。改築の方針をめぐって役員同士が対立した。その他の信徒たちにもそれぞれ複雑な思いが去来していた。誰もが数十年をかけて献金を積み立ててきたのである。信仰においてとはいえ、自らが身銭を切ったそのお金が、自分の願いとは全く違う方針に使われようとしている その怒りをわたしにぶつけてくる人もいた。教会は資金繰りが苦しくなった。苦しくなったのは資金繰りだけではなかった。教会員たちの心繰りもまた苦しくなったのである。そんな教会員同士の対立を外部の人が見れば「これが信仰者のすることか」と呆れかえるかもしれない。だが、わたしは思うのである。たちこめる人間臭のただなかに神はいると。なぜなら神は、多様性の中にその姿を顕すからであり、その多様性とは常に緊張と対立とをはらみ、時には衝突をも引き起こすものだからである。この対立や衝突を通してこそ、わたしは教会の人たちと、悲しみや苦しみを分ちあってきた。」

　 …如何でしょうか？私は今日のローマの信徒への手紙の言葉を思いました。

「わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。」私たちは皆、神様の前には等しく弱い者なのです。“自分を過大に評価してはなりません”とパウロは言っています。自分は強いぞと、どんどんリードしていくぞと思っていると（牧師などは特に要注意ですが）キリストの恵みが見えなくなってしまうのです。「神が各自に分け与えてくださった信仰」とありました。そう、神様は私たちに信仰を“分けて与えて”下さっているのだと思います。一人で全部持っているのではない。だから、「教会」なのです。「教会」の原語は、「神に召し集められた群れ」という意味です。神様のご意思が先行しています。私たちは何の功（いさお）も無いのに、イエス様の十字架のゆえに、神様の子として愛し、受け入れて下さっているのです。その愛は、いつまでも絶えることがない愛です。

パウロはここで「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。…喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」と語っていますよね。“喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く”。簡単なことじゃありません。そんなことはパウロも分かっていたに違いありません。しかしだからこそ、「苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい」ということではないでしょうか？“聖霊の力を受けて、主に仕えなさい”ということではないでしょうか？

私たちが毎週一緒に捧げている礼拝というのは、神様の恵みなんです。ここでこそ私たちは心の重荷が降ろせる。主にすべてお委ねすることが出来る。モヤモヤした思いや、苦しみ・悲しみ、卑屈な思いを持ったままでもよいと思います。私もそういう時があります。でも一緒に神様の前に進み出ることが許されている！これは神様の大きなご愛ではないでしょうか。単に“個人”ではない、「私たち」の礼拝を捧げ、生きていきましょう。お祈り致します。

主イエス・キリストよ、あなたの前に召し集められたお互いです。今十字架のみ許にあります。そこでお互いを尊重出来ますように。また自分自身のことをも、あなたに深く愛されている価値を取り戻すことが出来ますように。この礼拝を、この交わりが与えられていることを感謝致します。私たちの交わりも、私たちのウィークデイの生活も、これからも聖霊によって正しく導き、あなたを讃美しつつ歩ませて下さい。主の御名によって祈ります。アーメン。